

「憎まれアテンを推す理由」

田中 環子

その棺の前に立った時、驚きと恐怖で私は足がすくみました。これまでに見てきた棺たちとはあまりに様子が違っていたからです。持ち主を示す名前の部分と顔は削り取られ、むき出しとなった木の表面は細かくめくれ上ってまるで魚の鱗のようでした。名前や顔を削ることは存在そのものの抹殺であり、魂の戻り場が失われることを意味します。彼を憎んだ当時の人々の、決して許さないという強い思いが数千年の時を経てなお目の前に生々しく残っていました。棺の持ち主の名はアクエンアテン。ツタンカーメン王の父としても知られる、古代エジプト第一八王朝のファラオです。

神々と人間を繋ぐ唯一無二の存在として敬われていたはずのファラオが、なぜこのような目に合うこととなったのでしょうか。

彼は元々、アメンヘテプ四世という名で即位しました。しかし突然「アテン神へ有益なる者」を意味するアクエンアテンへと改名し、都をも移します。これは神の中の王とも呼ばれ崇拝されてきたアメン神をはじめとする神々とその神官団との決別を意味し、彼の推し進めた多神教から一神教への宗教改革は国家を大混乱へ導くこととなったのです。

遷都の裏で、アメン神の彫像や神殿はことごとく破壊されました。複数の神を表すヒエログリフは削られて単数形に改められ、伝統的な祝祭は施行されなくなりました。民衆たちはこれにより、神々へ直接感謝や祈りを捧げられる貴重な機会を失いました。同時に冥界の支配者であるオシリス神の存在をも否定されたことにより、来世で得られたはずの永遠の生命までも危ぶまれることとなりました。このような思想や価値観の押しつけは、人々に大きな戸惑いと苦しみを与えたに違いありません。

アマルナへの遷都と宗教改革は、富と勢威を持ちつつあったアメン神官団から権力を取り戻す意図があったとも言われています。しかし外交をおろそかにした代償として、その治世では先代までに築き上げた広大な領地を多く失うこととなりました。民衆の心を王へと取り戻す算段はことごとく外れ、アテン信仰と新しい都アクトアテンは彼一代限りで終わりを告げます。

ではこの「異端の王」として悪名高いアクエンアテンは、果たしてただ自らの私利私欲のためだけにここまで思い切った改革を進めたのでしょうか。

アマルナで発見された『アマルナ書簡』という文書があります。三八二枚もの粘土板から成るもので、そのほとんどは近隣国との外交書簡です。この中に他国からエジプト軍の派遣要請があった際、アクエンアテンは軍隊を送ることなくアテン神の祝

福を与え、平和を説いたという記述があります。

アテンは太陽神。そして太陽とは、分け隔てなく万物に降り注ぐ恵みの光であり、世界に生命と繁栄を与える存在であると彼は讃えました。他の神々を迫害してまで掲げたアテン信仰を通し、彼は異国の人々を含めた全人類の日常を照らす希望として、平和の象徴として、太陽を崇めたのかもしれない。そしてこの地上で生きる「今」と現実にくそ光を当てたかったのではないか。私は、調べるにつれこう思うようになりました。

この時代には「アマルナ美術」と呼ばれる独特な芸術も生まれました。ファラオと王妃を同じ大きさで描くなどこれまでにない自然で写実的な描写が特徴とされていますが、アクエンアテンが自ら導いたものとも言われています。ここにも私は、理想ではなく現実の中にある美に目を向けようとする思いを感じます。神官達から権力を取り戻そうとし、私欲のために対外政策を怠った人というイメージもあるアクエンアテンですが、ファラオでありながら戦いもこれまでの様式美も捨て、新しい価値観を広げようとした彼の掲げた夢に私はとても興味があります。

歴史を学ぶ意義とは、一体何なのでしょう。衣食住を満たし、直接命を救うためのものではありませんが、歴史を通して私たちは、自分と同じ人間が歩んできた確かなしるしを辿ることができます。宗教や文化、言葉も習慣も異なる中で、皆が懸命に生きた積み重ねを知る旅でもあります。数千年経った今もなお私達は愚かで悲しい争いを繰り返していますが、私は古代の人々の試みや暮らしに思いを馳せ学ぶことで、視野や選択肢を広げ異なる価値観への理解や敬意を持つことができると信じます。そこからきっと、過ちを避け立ち戻る力や、考えや主義主張の違いから起こる衝突を解決するためのヒントを得ることができると思うのです。

唯一無二の価値観で強引に改革を進めようとしたアクエンアテン。結果として人々の心を傷つけ、国内の混乱を招きその試みは失敗に終わりました。しかし彼がどんな理想を抱き、どう努めもがいたのか。数千年の中でもひととき異色とされるあの一時代に、人々は何を感じ、夢みたのか。私はこれからも当たり前を疑い、確かな情報を得ながら想像力を働かせ、今に、これからの活かすための学びを深めてゆきたいと思っています。

【参考文献】

河合望『古代エジプト全史』雄山閣 2012年

河合望『ツタンカーメン 少年王の謎』集英社 2012年

近藤二郎『古代エジプト解剖図鑑』エクスナレッジ 2020 年

イアン・ショー&ポール・ニコルソン『大英博物館 古代エジプト百科事典』1997 年

日経BPムック『ツタンカーメン 100 年』日経ナショナルジオグラフィック